図書館だより

第26号 2005.10

HAKUOH

白鷗大学
白鷗大学女子短期大学部

ヒントは図書館にあり

白鷗大学経営学部助教授
山田徳彦

一人でゆっくり旅行したいなぁ、等と切に願うようになったのは、いつ頃からだろうか。学会等への出席や家族旅行で遠方に行くことはある。ただ私が求めているのは、そういう旅行ではない。交通経済を専攻する筆者は、院生時代に主要な関心が「地方公共交通」にあったこともあって、２週間くらい毎日ひたすら鉄道に乗り続けて、日本のあちらこちらに行く機会が何度かあった。電車･汽車に乗って、最初の１時間くらいは時刻表やスケジュールを確認したり、資料に目を通したりして、その後窓の景色を眺めながらウトウトとし、目覚めたら後は目的地までひたすらボーッとする…もちろん、無我の境地等という高尚な域に到達するわけでなく、あれこれととりとめのないことを考えていたのであるが。今から思えば非常に貴重な経験であった（旅行というより“修行”に近い）。

全く偶然に手にとって読んでみたらおもしろくてのめり込んでしまった、という本に出会えなくなったのはいつ頃からだろうか。もちろん研究に必要な本･論文は一生懸命に探し読解に努めているし、誰かに推薦された本や以前に読んでおもしろかった作者の別の作品を読んだりはする。その結果、私の研究は進み、知識量は増え、話題は豊富になり、思考方法は少しずつ洗練されていると信じたい。けれども、たまたま読んでみたらそれが「運命的な一冊」であった、という経験をすることはなくなってしまった。もしかしたら出会っているのに、その機会を生かし切れていないだけかもしれない。

２つの疑問への、きわめて陳腐な、けれども最も納得のいく答えは、自由な時間が減ったことと柔軟な選択ができなくなった、というものである。同世代の友人に話したら、「そんなことあたりまえだろう」とお叱りを受けそうである。けれども「時間的なゆとりがあって、もっとよい答えが見いだせるまで選択肢を試してみる、今から思えば何と幸福なことだろう！　大学生は本来、きわめて幸福な状況にいるのだ。」という考えにはきっと納得するだろう。

現在大学生である皆さんには、そうは思えませんか？おそらく自分で思っている以上に貴重な時間を過ごしているんですよ。「今はわからないけど、将来振り返れば貴重な時間」をどのように過ごしたらよいのでしょうか？人によって理想的な時間の過ごし方は異なりますので一概にはいえませんが、私には図書館にヒントがあるように思います。そう思うのは私だけではありません。例えば夏目漱石も『三四郎』の中で、図書館でいろいろな書物に触れることの意義を強調するくだりがあります。地方から東京の大学に進んだ主人公三四郎が、先が見えずとまどうばかりの毎日を過ごしているとき、友人の与次郎が彼をある種の社会科見学に連れ出し、一通り見物し終わった後「これからは図書館じゃなくっちゃいけない」と告げます。三四郎は、その後図書館に入り浸り、読めても読めなくても多くの本を手にとり、そこでいくつかの発見

をします。

今日、夏目漱石の時代と異なり、図書館には本だけでなくビデオ、DVD、パソコンとあらゆる情報が総合的に網羅されています。時代は変わっても図書館に「総合的な知」が蓄積されるのは変わらないようです。おそらく将来に向けた貴重な時間を過ごすには最適な場所であるに違いありません。いろいろな情報、考え方に触れ、自分でよく考えてみる、というプロセスは時代や個人のちがいに関わらず、普遍的に必要な作業でしょう。

私の考えに疑いをもたれるのであれば、早速図書館でいろいろな書物やビデオなどに触れてみてください。きっといつか私の言っていることの意味がわかるはずですから。

古代の国際学術都市アレクサンドリアと図書館

白鷗大学発達科学部助教授
益　田　勇　一

アレクサンドロス大王（前356頃－前323）は「東方遠征」によってヨーロッパ、エジプト、アジアにまたがる一大帝国を築き、各地にアレクサンドリアと称する都市を建設した。その中で最も発展し、今日まで名を残したのはエジプトの地中海岸につくられたアレクサンドリアである。しかし彼は、最盛期にはローマをも凌ぎ、人口が100万にも達しようとしたとされる古代世界最大の都市アレクサンドリアの繁栄を見ることなく遠征先のバビロンで病死している。

アレクサンドロスの急死にともない、帝国は直属の将軍たちによって分割され、エジプトにはプトレマイオス朝が成立する。アレクサンドリアが国際学術都市へと発展する基礎は、王朝初期の３人の王たちによって築かれた。プトレマイオスⅠ世（在位前304－前285）は王朝の首都機能を、歴代のファラオが行政府を置いたメンフィスから、地中海諸国との交易に適したアレクサンドリアに移転した。また彼は、当地を政治経済の中心のみならず、文化の中心としても位置づけるべく王立の図書館を建設し、それに附属するムーセイオンと呼ばれた学問研究所には国の内外からすぐれた学者を招聘し、先端的な研究と後進の教育に当たらせたとされる。図書館には莫大な予算がつぎ込まれ、世界中から書籍を買い求め、購入できないものについては借り受けて写本として蔵書したようである。プトレマイオスⅡ世（在位前285－前246）、Ⅲ世（在位前246－前221）も初代の遺志を継ぎ、蔵書の充実に努めた結果、その数は50万冊近くに達したとも伝えられている。当時としては世界最大規模である。特にⅢ世の蒐集癖は有名で、アテナイの国立文書館に保管され、貸し出し禁止であったアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスらの自筆原稿をかなりの額の供託金を積むことで借り出し、原本を返却せず、写本の方を返したという話も伝わっており、その書物への偏愛ぶりを窺がわせる。

プトレマイオス王朝のこうした学術・文化への強い関心は、アレクサンドロス以来の伝統ともいえる。彼はホメロスの『イリアス』を愛読していたようだが、それは彼の家庭教師を務めたアリストテレス自身による校訂本であったといわれている。なんとも豪奢な話である。そして、アレクサンドロスとともにアリストテレスの教えを受けたのがプトレマイオスⅠ世であり、彼は息子（プトレマイオスⅡ世）の家庭教師としてテオフラストス（アリストテレスの設立した学園リュケイオンの継承者）を望んだが叶わず、その弟子ストラトンにその任をまかせた。また、王立図書館の創設にあたってプトレマイオスの相談役であったとされるファレロンのデメトリオスもテオフラストス門下であった。王立図書館と附属の研究所ムーセイオンを拠点としたプトレマイオス朝アレクサンドリアの文化は、このようなギリシア哲学との深いつながりを底流として開花していくことになる。

アレクサンドリアに招聘された学者たちには、高額の俸給と賄い付きの寄宿舎が与えられ、ムーセイオンに隣接した食堂では食事も供せられたし、さらに、免税特権もあったようだ。そして何よりも、研究のための十分な時間と資料が保障された。すぐれた研究者を集めるために、現在でもこれ以上の方策は思い浮かばないであろう。したがって、アレクサンドリアには今日でも広くその名を知られている偉大な学者たち

が数多く集まり、長きにわたって高い学問水準を保ち続けることができた。エジプト生まれのエウクレイデス（前４－前３世紀）は、アテナイに渡りプラトンの弟子から数学を習ったが、プトレマイオスⅠ世の招きでアレクサンドリアに戻り『幾何学原論』を著す。アルキメデス（前287頃－前212）はシシリア島のシラクサ生まれであるが、数学を学ぶためにアレクサンドリアに遊学し、エウクレイデスの一門と共同研究を行なったとも伝えられている。今でも教科書に載っている地球の全周を測定する方法を最初に考案したとされるエラトステネス（前275－前194）、天文学では、コペルニクスよりも1800年もはやく地動説を唱えたサモスのアリスタルコス（前310頃－前230）、しかし実際には、キリスト教の宇宙観と結びつき中世を通して広く流布することになる天動説を集大成したクラウディオス・プトレマイオス（85頃－165頃）、古代最高の医学者の一人ガレーノス（129頃－199頃）、哲学では、新プラトン主義を代表するプロティノス（204頃－269頃）、これらはすべてアレクサンドリアの学問環境が輩出した偉人たちである。

アレクサンドリアは古代最大の図書館とプトレマイオス朝における学者の重用により、ヘレニズム時代を通して文化の中心であり続けた。ヘレニズムの特色としてギリシアとオリエント相互の文化的融合があげられるが、アレクサンドリアにおける異文化交流はその典型であろう。ムーセイオンは国籍や民族の違いを越えて集められた学者たちにとって、研究の場であると同時に交流の場でもあった。そしてその成果は再び世界に向けて発信されたのである。ガレーノスはペルガモンに帰り、アレクサンドリアで得た解剖学の知識を医療の現場で活かすことになるし、プロティノスはローマに渡り、哲学の学校を開いた。ヨーロッパにもアラブにもイスラムにも古代以来、膨大な時間と人々の研鑽によって形成された独自の文化と相互交流により新たに積み上げられた文化が層を成して堆積している。われわれはそうした伝統に対して敬意を持って接したいものである。

〈古代アレクサンドリアと図書館に関する本〉

『謎の古代都市アレクサンドリア』
野町　啓著　講談社現代新書、2000年

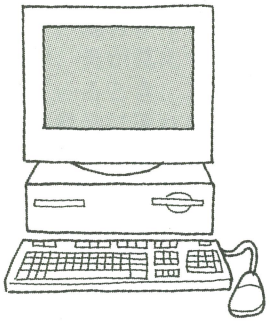
『古代アレクサンドリア図書館』
モスタファ・エル＝アバティ著　松本慎二訳、中公新書、1991年（本館所蔵）

『知識の灯台　古代アレクサンドリア図書館の物語』
デレク・フラワー著　柴田和雄訳、柏書房、2003年

図書館ニュース

■ワークステーション利用案内

平成17年４月より、ワークステーションの利用方法が、以下のとおり変更になりました。



- **カウンターでの利用申請が不要となりました。**
  ご自由にご利用ください。（学内の方のみ利用可）

- **ヘルプデスクが設置されました。**（本館のみ）
  情報処理教育センター学生スタッフが常駐しています。
  不明な点がありましたら、お気軽にお尋ねください。

- **利用時間が閉館１時間前までとなります。**（メンテナンスの都合上）

【平　日】９：00～20：00
【土曜日】９：00～16：00　　※長期休暇中は、時間変更があります。

新着図書　ピックアップ

007.3/TA　「IT業界資格と就職ガイドブック」
高作義明・加藤多佳子著　新星出版社

019.5/MO　「きもちでえらぶえほん100さつ」
森惠子著　学習研究社

146.8/NA　「子どもの心理臨床入門」
永井撤著　金子書房

290.1/YA　「暮らしの地理学」
山嵜謹哉・金井年編　古今書院

314.89/HO　「大統領のつくりかた」
堀田佳男著　プレスプラン

318/HA　「地方行政を変える」
服部勝弘著　大村書店

327.19/IN　「司法のしゃべりすぎ」
井上薫著　新潮社

335.5/MI　「世界でいちばんやさしいM&A入門ゼミナール」
宮崎哲也著　三修社

K47/KA　「ビジネスマナー早わかり事典」
葛西千鶴子監修　池田書店

K91/TE　「ひとりでもわかる簿記論」
寺坪修・井手健二・小山登著　創成社

345.3/NO/05　「基本所得税法」
野水鶴雄著　税務経理協会

374.3/CHI　「日本の教師再生戦略」
千々布敏弥編　教育出版

375.8/IN　「誰もがつけたい説明力」
井上一郎著　明治図書出版

Y/KO　「幼稚園・保育所・保育総合施設はこれからどうなるのか」
小宮山潔子著　チャイルド本社

519/PH　「図解地球環境にやさしくなれる本」
PHP研究所編　PHP研究所

547.48/MI　「知っておきたいWebデザインきほんBOOK」
宮窪伸治著　新星出版社

648.2/HO　「食の安心・安全の経営戦略」
堀田和彦著　農林統計協会

E/HA　「こりすのはつなめ」
浜田広介作、いもとようこ絵　金の星社

780.4/NI　「知っておきたいスポーツ・心・体の大切な話36」
新畑茂充著　黎明書房

815.8/SA　「敬語の教科書」
佐竹秀雄・西尾玲見著　ベレ出版

837.5/AN　「英文翻訳術」
安西徹雄著　筑摩書房

J3/HI　「大人のための児童文学講座」
ひこ・田中著　徳間書店

935/BO　「美学とジェンダー」
エリザベス・A・ボールズ著、長野順子訳　ありな書房

989.53/CA　「カレル・チャペック童話全集」
カレル・チャペック著、田才益夫訳　青土社

ささやき

「レファレンス」という言葉をご存知ですか？レファレンスとは、資料の探し方や所在など、図書館利用に関して分からないことがあった際に、館員がサポートをするサービスです。お気軽にお尋ねください。

平成17年11月1日　発行
編　集　図書館だより編集委員会
発　行　白鷗大学総合図書館
〒323-8585　栃木県小山市大行寺1117
(0285)22-9737（直通）
ホームページ　http://www.hakuoh.ac.jp
印　刷　㈱尚文堂印刷所